
山犬の姫と

紗斗美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山犬の姫と

【Nコード】

N1500W

【作者名】

紗斗美

【あらすじ】

互いに別々の道を進み、生きる事を誓った青年と少女は再び巡り会う。

序章（前書き）

またやってしまいました。もののけ姫の続きを考えてみようかなと思ひ至り、千と千尋の神隠しに続きジブリシリーズの続編を捏造してみました。こんな続きは嫌だ！、あそこで終わっているからジブリなんだ！という方は見ない方がオススメです。内容は前回投稿した千と千尋の神隠しその後を参照して下さい。あんな感じで今回も、もののけ姫その後みたいな小説にしようと思っています。登場人物の話し方が異なるかもしれませんが、月日が経てばきっとそうなるのでは…？みたいな感じで書かせてもらいました。

平行してOn Your Markもほぼオリジナルですが偶に投稿していますのでご覧になる方はどうぞ。

面白さや楽しさは無いと思いますので御了承下さい。

序章

人間とは共に暮らせないと森へ戻り、生きる事を決意した少女。
「サンは森で、私はタタラ場で暮らそう。共に生きよう……」
山犬の背で静かに頷く少女に彼もまた、誓いをたてる。

再び会いに行く…と。

序章

燃え盛る炎は有無を云わさず“あの時”を思い起こさせる。そして
彼方此方から響く銃声の音と人間の叫び声。既に森の生き物達は奥
地へと逃げ込んだ為、辺りは静まり返っている。少女は土面をつけ
ると石槍をきつく握り締めた。

「いつになっても人間は森を壊すんだ。これ以上森の生き物達を傷
付けさせるものか。行くよ、お前達」

隣に寄り添う二匹の山犬の頭を軽く撫でると内の一匹に跨り、急な
斜面を駆け下りた。

「ひっ…、や、山犬が出たぞー！！もののけ姫もいる！！」

「退却！！退却！！一旦戻れー！！」

焦りから上擦った声で叫ぶ兵士を蹴散らし、目標を定めた少女の槍

は一直線に豪將の首を切り落とす。悲鳴にも近い声が再び上がり、まるで烏合の衆の様に戦意を失った残兵が散らばる。一通り暴れた山犬と少女は残る大将に短剣を突き付け仮面越しに伝える。

「二度とこの森へは近づくな。次にここへ来た時、私がお前の喉元を切り裂いてやる」

無様にも怯えた武將は言を發するよりも早く一目散に森を後にした。

まだ所々に草木が燻ぶる箇所が見られる中で少女は土面を外し、先程まで戦場となっていた蒼丘の上に立つ。

「だから人間は嫌いなんだ」

ポツリと呟いた己の声でいつかの青年を思い出す。彼は今、何をしているのか。ヤツクルに乗って野を駆けているだろうか。そんな他愛も無い事を考え、無性に彼に会いたいという気持ち湧いてきた。

「…アシタカ……」

彼の声が頭の中で木霊する。

会いに行くよ、ヤツクルに乗って…

序章（後書き）

短かったです。

一応序章なのでそこまで力を入れてません。

誤字、脱字が目立つと思いますが、どうぞ温かい目で見てください。
文才無いんです。

次回はテストが終わったら投稿しようと思います。それでは御覧頂きありがとうございます。

その森は（前書き）

思いがけず次のお話を書くことが出来たので携帯から投稿します。
きつと内容的に変な部分が多いと思います。そのうち名前を出しま
すが、きつと読んでいるうちにすぐ分かるでしょう。（笑）

その森は

囁かな小鳥の囀りに促されるかのように彼は目が覚めた。ゆっくりと上体を起こし、窓の向こうを見つめる。戸口の側でカタリと音がして視線を移せば、ヤツクルが器用にも鼻先で戸を開け、中に入ろうとしていた。

「ヤツクル、すまない。寝過ぎたようだ」

彼はヤツクルに語り掛けると身嗜みみだしなを整え、戸口に歩み寄る。手綱を取ると人気の無い路に出た。

自ら門を押し開けくぐり抜ければ、引き連れて来た相棒に乗る。

「今日は山の方に向かう。昨日の雨で川は増水しているからね」
そう云うと山へ続く斜面を軽やかに登っていった。

草木の焦げ目を見つけた青年はしばらく観察した後、思い詰めた表情で己の足元を見つめる。獣の足跡に混じり小柄な人間の足跡が見受けられる。そして血と腐肉の臭いを残しその場に生き絶えている兵士の残骸を見れば、ここで何が起こっていたのか想像ができた。同時に、自分がこれから会いに行こうと考えていた人物が意外にも近くに居る事を暗に示していた。

「そう遠くへは行っていない、かもしれない」

今度は慎重にその足跡を追うべく、ヤツクルには乗らずに手綱を引き急な斜面を移動する。僅かに開けた場所へ出ると、何かが通った跡が鮮明に残っていた。

「まだ、新しい…」

ゆっくりと視線を移せば木々の合間に“それ”を見た。

「…あれは…シシ…神…？」

光の反射のせいで良くは見えないが“それ”はあの時の様に優雅に駆けて行った。高鳴る鼓動を抑え自分が確かに見たであろう場所へ

赴く。そこは昔自分が少女に助けてもらった、あの場所だった。

「気のせい…か？」

突然居なくなつた主を追いかけるようにヤツクルもまた、顔を覗かせる。

「どうやら私の見間違いだったようだ。さあ、行こう、ここにも居ないみたいだ」

角に手を掛け跨ろうとした時、パキという乾いた音と共に気配を感じて振り向く。そこにいた人物を見て微かに抱いていた希望は打ち碎かれた。

「そこに居る奴は何者ぞ？我は北畠家の者成り。理由あつて、行く先を見失つてしまった。すまぬが、この森を出るには彼の方角へ向かえば良いか」

その男の身なりはひどい物だった。戦装束は切れ切れに、至る所から出血していた。彼もまたその問いに応えるため声を上げる。

「私は此処より西に位置する、蹈鞴たたらの集落から来た。何故その様な傷でこの森を彷徨うのか、森を出るにその手負いでは容易くはないぞ」

それを聞いた男の表情はより一層の影を増す。

「構わぬ、早う申せ！一刻を争う！」

何かに怯え、必死に逃げ道を乞うその兵士には焦りの色が窺えた。

青年は静かに指を右に向け丁寧に道を述べた。

「右にまっすぐ行けば、森を抜ける斜面がある。そこを降りれば川に出る。川に沿って歩けばいずれ村に着くだろう」

兵士は礼を云うと言われるがままにその場を後にした。

「一体、何が…」

残された彼は暫くその男の来た道を見つめていた。

その森は（後書き）

ヤツクルに乗るのはもちろんあの方しか居ませんよね。そして北畠^{きたはた}と読みがついていますが実際は“きたばたけ”と読みます。実在した武将です。興味がある方は調べてみて下さい。
それではお読み頂きありがとうございました。

名前（前書き）

少し話は戻りまして、北畠の兵士が彼に出会う前の所です。文の内容はめっちゃくちゃです。それでも宜しければお読み下さい。

名前

少女は逃げていた。祟り神と化した黒い塊から。それでも元に戻って欲しいと願い叫び続けながら。

「これ以上自分を見失わないで！祟り神になつてしまつ！」

しかし、我を忘れ暴れる土地神に声が届くはずもない。隣を伴走する山犬が少女を諭すように言を発する。

「サン、そいつはもう手遅れだ。このままでは祟り神の巻き添えになるぞ」

「でも！」

なんとかして助けたいと瞳で訴える。しかし祟り神となつた土地神が元に戻る事など有りはしない。サンはきつく眼を瞑ると決心したように顔を上げた。

「…ごめんなさい……」

ポツリと呟くと山犬達と共に脇の小道に逸れる。自我を失つた祟り神は速度を落とすことなく直進し、突き当たりの大木を左に曲がっていた。

「どうして、人間は戦ばかりするんだ！森の生き物達の気持ちも考えずに！どうして……」

サンは抑えきれない怒りに震えていた。そして運悪くもそこを通りかかった一人の兵士がサンを見つけ悲鳴をあげる。

「き、貴様はも…もののけ姫…」

それは少女にとっての通り名であり、いつも呼ばれる名。しかし、今の状況で兵士の言葉は募り募っていた怒りをいとも簡単に弾き出させた。

「人間の分際で、その名を軽々しく…呼ぶな！」

懷に隠し持っていた短刀を男に目掛けて突き出した。突然の攻撃に対応出来なかったその男は彼方此方を斬りつけられ、足下をとられた。バランスを崩したまま木にしがみつこうとした時、眼前に白い

動物が現れる。山犬が今にも自分を噛み殺さんばかりに襲い掛かり、掴み掛けた枝はするりと手の内から抜けた。

「うわあああああつ」

すぐ真後ろが少し下がった崖となっていた為に、あつという間に見えなくなった男を臭いで確認する。

「…まだ近くにいる。…あの人間を…殺してやる」

土面をつけると山犬に乗り、男が落ちていったと思われる場所に向かう。しかしそこに男の姿は無かった。木の枝は折れ、さっきまで人が座っていたと思われる跡もしつかりと残っている。サンは耳を澄ました。僅かに離れた場所から草木の擦れる音が聞こえる。音と臭いを頼りにその後を追った。そしてある場所でそれは止まった。無意識にサンも止まる。次いで聞こえてきた声にはつととなった。

「今の…声…」

不思議とこみ上げていた怒りは収まり、静かに会話に耳を傾ける。どうやらこの森を抜け出る場所を知ったらしく、自分が追っていた男はさらに遠く離れていく。しかしこれ以上追うつもりは無かった。そこに現れた別の人間がその気持ちを变えさせたから。状況を理解出来ないその“彼”^{ひと}は走り去る男の後ろ姿をじつと見つめていた。少女は山犬から降りるとゆつくりと、確かな足取りで草々を踏み分け、彼の前に姿を出した。少女を捉えた彼の瞳も突然の事に驚いていた。

「…アシタカ……」

そう呼び掛ければ、彼もまた自分の名を呼ぶ。

「サン」

その声が、自分の名を呼ぶ声があまりにも心地良く耳に届いた。

名前（後書き）

はい。出会いました。

二人とも。もう少し感動的な出会いをしてもらいたかったのですが如何せん、私の文章力では到底無理でした。テスト期間なのに勉強そっち退けで投稿しました。

また次回お会いしましょう。

決意と（前書き）

テストがようやく半分終わりました。一体いくつ落としたか知りません。きっと全てが終わった時に分かるでしょう。あの三つは間違いないで再試ですかね。

今回は忙しくてあまり文の構造を考えずに作りました。かなりぐだぐだです。それでも宜しければご覧ください。

決意と

最初に思った事はあの時と同じく血に汚れながらも凜とした佇まいで美しかったという事。次に思った事はあまりにも複雑な感情を抱いている、そんな表情をしている彼女が儚く消え入りそうだったという事。そして伝えたい想いだけが先走り、なかなか言葉として発するに時間を要した。漸^{よっぴ}う絞り出した第一声がこれだった。

「五年ぶり…だな、こうしてこの森で会うのは」

とても嬉しそうに優しく微笑む彼にサンは一瞬躊躇^{ためら}ったがそれでも素直に喜んだ。

「ちようど死にかけてたお前を運んだのもこの場所だった。ヤツクルも元気だったか？」

隣で此方も嬉しそうに喉を鳴らしサンに挨拶をしている。

「そうだな、あの時は本当に死ぬかと思った。今の私がこうして居られるのはサンのおかげだ」

アシタカの言葉にサンは少しだけ顔を伏せる。

「…あれは、シシ神様がお前を生かした。私はその意志に従っただけだ」

彼女らしい言葉にアシタカは苦笑う。

「シシ神…か、其れらしき生き物を見かけたが、恐らく気のせいだろう」

そう云えば、急に伏せていた顔を上げる。彼女の耳飾りが音を立てて揺れた。

「シシ神様が！？この森にいたのか！？」

何かを確認するような懸命な少女にアシタカは首を横に振る。

「いや、シシ神と確定した訳ではない。私の見間違いだっただのかも
しれないよ」

そう、と小さく漏れたサンの声はやはり消え入りそうな程小さく聞こえた。一介の不安を感じた彼は少女に尋ねた。

「何か、あつたのか？」

しかしサンはふるふると否定するかの様に首を横に振った。

「サン、本当に何も…」

「無い、アシタカには関係の無い事だ」

その強い眼差しに言いかけた言葉を呑み込む。

「そうか、ならば良いのだが。本当に、何かあれば私を頼って欲しい。サンが独りで抱えられない事があれば」

「分かった」

それだけを云い残し彼女は山犬達と元来た道を引き返していった。

唯一人、森の切り株に腰を下ろした彼は考えていた。

あの表情は、何かを隠している。

そう思えた。彼女が人間に頼る事など無いのだ。それが如何に彼女にとつて屈辱的であるかもまた、知っていた。

「何が起きているのだ」

呟いた声は森の中に吸い込まれるように消えた。

「いいのか、サン」

山犬の声で我に返る。

「これでいいんだ、人間の力は借りない。自分達で解決しなくちゃいけないんだ。アシタカには、関係無い」

そう云うも、瞳は揺れていた。恐らくは葛藤しているのだろう。先程見捨ててしまった土地神を如何にするか。アシタカは以前祟り神を射殺し、その呪いをつけた。きっと彼なら、今回の件もまた全てを守る為に自らに呪いをつけるだろう。それだけはさせたくなかった。しかし、このまま野放しにしておけばやがては森に被害が出てしまう。あの祟り神は人間に対する深い憎しみを抱いていた。そう掛からないうちにいつかは人里に下りて行き、村を破壊するだろう。

その度に人間が、祟り神によって呪われた地だと叫びながら森を壊していくのを黙って見ている訳にもいかなかった。

「アシタカには頼らない、そう決めたんだ」

小さく声に出せば再び祟り神が通ったと思われる道に戻る。

「こんな時、母さんはどうしたかな」

側にいるもう一匹に尋ねれば低く喉を鳴らし頂垂れる。暫く思案した後、サンは顔を上げた。

「さあ、行こう。祟り神となった産土うぶすなの神様を止めなくちゃ」

その表情は強い決意に満ちていた。

決意と（後書き）

私の中でサンはきつと、アシタカの呪いを見ているからこそ、もう二度と祟り神には関わって欲しくないと思っている……てか思っています。欲しいです。そんな流れで今後も話を進めていこうと思います。ここまでお読み頂き有り難う御座いました。

女衆（前書き）

短いですが一先ず場所を変えてみました。読みにくいと思います
が、ご了承ください。

女衆

タタラ場の一角、集落の女達が集い汗水垂らしながら板を踏む溶鉄炉がある。

「ねえ、聞いたかい？倭寇の和船が川岸に停まってるって話」

「倭寇の船かいね、きっとエボシ様に例の書簡を届けに来たのよ」

「暇いとまが出たら見に行っても叱られないかしら」

「あたかも見に行きたい」

そんな彼女達の楽しそうな世間話は指揮官の合図で途絶える。

「ほらほら、あんた達。喋ってないで足を動かさな」

「「「はあい」」」

「ねえトキもさ、後で見に行かない？」

内の一人が指揮官であるトキを誘う。しかし返答は否だった。

「あたしはいいいよ、ここでアシタカ様を待つてる。きっと朝餉あさけがまだだろうからさ」

少し残念がる仕草をした女もすぐに作業に集中する。トキもまた裾を上げ踏み板に乗る。陽は疾うに高く昇っていた。

「ゴンザ」

鉄の強度を確認していた女が不意に側に控える大男に声をかける。

「へい、何でしょう。エボシ様」

僅かに驚いた男が持っていた槍を落しそうになるが、慌てて持ち直す。

「アシタカを呼んで来てくれ、少し話がしたい」

「分かりました」

アシタカという名を聞いて少し不快な顔をしたゴンザだったが素直

に従った。

「だから、アシタカ様は今朝から出て居りませんけど」

「話を通じないでくの坊な、アシタカ様みたいに人が善くて寡黙な男だったらもう少しマシだったろうに」

「しっしっ、アンタに用はないよ」

タタラ場の女達に矢継ぎ早に辛辣な言葉を並べられ、流石のゴンザもこめかみを引くつかせた。

「ええい、いい加減にせんか。エボシ様がお呼びなのだ！貴様らの相手をしている場合では無いんだぞ」

散々に叫べばややあつて中からトキが顔を出した。

「何の騒ぎだい？」

側に居た一人が事情を説明するとゴンザの前に仁王立ちするかのようにトキが立つ。

「アシタカ様はまだ戻らないよ、帰ってきたら伝えておくからアンタはどっかに行つてな。他にやることがあるんだろう？」

これには彼もぐうの音も出ず、おずおずと引き下がった。

「何だろっ、嫌な胸騒ぎがする……」

トキは不安げな面持ちで門を見つめていた。

女衆（後書き）

今までで一番短いのでは…なんて思ったりしました。ゴンザの喋り方もエボシ様の喋り方もトキの喋り方も難しいです。書きやすかったのはタタラ場の女A、B、Cくらいですね。名前はありません。考えて無いので。いつかはつけようと思いますが、それがいつになるのやら…。暫くは女A、女B、女Cという事で（笑）
それではお読み頂き有り難う御座いました。

朝餉の前（前書き）

投稿一週間で累計アクセス数が1100を超えろという驚きの数値にびっくりです。こんな小説を読んで下さる方がいるという事に感無量でございます。ダラダラと話が進むと思いますが、何卒御了承下さい。今回は、私自身書いていて納得のいく内容ではないので、いつか改訂するかも知れません。キャラが少し変わるかも知れませんが、それでも宜しければご閲覧下さい。

朝餉の前

門の前に立つと門番から声をかけられた。

「アシタカ様、女子達おなこがお探ししてありました」

不思議に思いながらも頷くとすぐさま重い音を立て、門が開く。中に入るとトキがいるであろう炉に向かった。案の定入り口に身を預けながら己の帰りを待つ人がいた。

「おトキさん何かあったのか」

問えばトキは振り向き、視界に彼の姿を捉える。

「アシタカ様、エボシ様が呼んでるんだ。その少し前に倭寇の使者が来て、今屋敷の方ではてんやわんやさ。何でも戦に鉄を要求してるとかでその対応に追われてるんだ」

「鉄を？分かった。今からエボシの所へ向かう」

事情を知り、離れの屋敷に向かおうとするアシタカをトキは引き留める。

「そうだ、アシタカ様、朝餉の用意が出来てるんだ。食ってかないかい？」

それに微笑みながら応こたえる。

「すまない。用事が済んだら頂くよ」

そう伝えると小走りで屋敷を目指した。

中には倭寇の使者が荒々しくエボシに鉄を要求していた。

「我々が欲するは鉄のみぞ。大人しく従えばこの集落も襲わずに済む。貴殿は話の分かる女と聞いたが、此ほどまでに頑として聞かぬ人間も初めてだ」

「私も倭寇というものが此ほどまでに横暴な賊だとは思わなかったぞ。いっその事、入り口を通す前にタタラの鉄で沈めておけばよかった」

外まで聞こえる会話に苦笑したが面持ちを引き締めて簾をくぐった。
「アシタカ、待ちくたびれたぞ。すまぬが、この者の相手をしてはくれぬか」

隣に立つ巨漢を指で示せば妖艶な笑みで事を委ねる。

「彼らは何処いずこより、この地へ？」

エボシの頼みを受け流し、一先ずは素性を確認する。自分を退けて会話をする男女に苛立ちを露わにした使者がアシタカに掴み掛かる。
「貴様、この私の目の前で勝手が通ると思っているのか！先に話をしていたのはこの我ぞ！」

しかし微動だに動かないアシタカに男は掴んでいた腕により一層の力を込める。それを顔色一つ変えずに掴み返すアシタカは静かに口を開いた。

「この鉄は戦の為に造られる物ではない。いくら倭寇の頼みであっても聞く訳にはいかぬのだ。ここを襲いたくば襲えばいい。この私がそれを許しはしないからな」

その言葉に男は下品にも大きな声で笑い飛ばした。

「襲えばいい、か。その言葉しかと受け取った。今この場で貴様の五体を捻り潰してやろう！」

掴んでいた腕を放し、男は腰に差していた金棒を乱暴に振り回した。屋敷内にいた人は皆エボシの指示により外に避難した。中ではアシタカが振り下ろされる金棒を横に避け、落ちていた鉄の棒を掴む。

その感触を確かめた後、尻払うように振り回されたそれを跳んで回避し男の頭上に己が持つ棒を打ちつける。

「がっ」

一瞬昏倒するかとも思われたが、その巨体だけに頑丈な様で頭かぶりを振ると正常な状態へと持ち直した。

「一筋縄ではいかないようだな」

そう云えば、男は口角を上げ薄く笑みを浮かべる。

「舐められては困る。こちらで鍛えた体だからな」

つとアシタカは武器がないか辺りを見回し確認する。男の姿を捉え

た時、その後ろにある武器を見て咄嗟に男の頭を飛び越える。着地と同時に掴んだ弓はしつかりと手に馴染んだ。

「このタタラ場を去るか、私の弓矢によって射られるか、どちらかを選ぶ」

二本の矢を同時に手に掛け、その先を男に合わせれば、いよいよ盛大な声で笑い始める。

「そんな弓矢でこの私を殺せると思うてか！射てみよ、そのか細き矢を！」

男の言葉にアシタカは狙いを定め、指を離した。

「エボシ様、中で一体……」

ゴンザが不安そうに尋ねればエボシは小さく笑みを浮かべ答える。

「どうやら終わったようだ」

その言葉通りに簾を上げアシタカが出てきた。

「すまない。なるべく被害は最小限にするつもりだったが、少々暴れ過ぎたみたいだ」

云われ、中を覗けば壁に貼り付けにされた男が見るも無残に吠えていた。体のラインに沿って釘のように打たれた矢は男の体の自由を奪っていた。

「この矢を……外せ！動けぬではないか！」

それを見たエボシはアシタカに問うた。

「トドメは指さぬのか？」

「後は好きにすればいい。私の役目は終えた」

彼らしいと言えば彼らしい応えにエボシは満足げに笑う。

屋敷を後にしたアシタカはトキが待つであろう仕事場に向かった。

朝餉の前（後書き）

いつの間に壁に貼り付けに？という問は見逃して下さい。きっと目にも留まらぬ速さで矢を射たのでしよう（笑）

倭寇とは海賊つて事です。使者というのは表向きの表現で実際は海上で暴れる賊だろうと思います。タタラ場にも鉄を欲して来たのではないか…なんて考えて話を捏造しました。海賊が陸に上がる時は物資を調達する為では、とも思いました。それではまた次回お目にかかれたら幸いです。

向かう先（前書き）

ようやく明日でテストが終わります。残すところ後一科目に気持ち
は浮かれています。今回も内容はぐだぐだですがご覧頂ければ幸
いです。

お気に入り登録を下さった方々、小説評価を下さった方々
ありがとうございます。こんな小説にお付き合いして頂き大変嬉し
く思います。

向かう先

事の発端は甲六が得た隣国の文が原因だった。先日懲らしめた倭寇の一派が明国^{みん}にて国籍を取る為に手柄を立てんと東に在する村々を焼き払うという事件が起きたとの報告だった。それを聞いたアシタカは自分の耳を疑った。ここより東に位置する村は数少ない。あるとすれば己が掟に従い脱村した蝦夷の村ではないのか。

「甲六、その文がいつ頃手に入ったのか教えてくれないか」
彼にしては珍しく僅かに焦りの色が窺えた。

「へ…へえ、これは隣国に米俵を買いに行った時ですから丁度三が日前の事ですぜ。旦那、どうか…なさったんですか」

この言葉に更にアシタカの表情は険しくなった。甲六の問い掛けにも答えず、すぐに牛舎の隣に向かう。入り口の止め棒を上げるとヤツクルを出し、角に手をかけ鞍に乗る。手綱を取ると出立の合図を出した。

「旦那、何処かへ行かれるんですか」

不意に声を掛けられ振り向けば、牛飼いの長が稲藁を抱え牛舎から顔を覗かせていた。

「東の地に赴こうと思う。すぐに戻って来ると皆に伝えてはくれないだろうか」

「へい、分かりやした。道中お氣をつけて下せえ」

頭巾を被り小さく頷くとアシタカはタタラ場を後にした。

アシタカがタタラ場を出る少し前の頃、山中で深手を負った山犬と少女が荒い呼吸を整えていた。

「このまま、暴れられたら、せつかく戻りかけた森が、またなくなっちゃう…」

木々の合間から空を見上げながらポツリと呟けば自分の左足を見やる。出血が酷く、至る所を擦りむき感覚が無かった。遠くの方から爆発音が聞こえる。

「あの人間達のせいだ、攻撃を止めさせないと」

槍を支えに立ち上がると、辺りを見回す。祟り神が通った跡がしっかりと残っている地面を睨み、山犬に跨った。

「上手く誘導しろよ、間違ったら俺達まで巻き添えだ」

「へえへえ、大丈夫でさあ。ここまで来れば蹈鞴たたらの集落も目前ですぜ」

山犬達より少し離れた位置に地雷を抱えた男が二人、会話をしていた。一人は長身で見慣れない異国の服を纏い胸には金に輝く紋章が施されている。もう一人は胴を身に付け、一見すると戦に出ていた体を為しているが隣に立つ男と同じような紋を左胸に刺繍つつていた。

「今回の襲撃が単なる祟り神によって齎もたらされた“事故”として片付けられねばならぬ。抜かりなく行えよ」

男がもう一人に云えば、彼もまた笑みを浮かべ頷く。

「勿論でござえますよ、旦那。タタラ場には借りがありますから、これ位造作もない事です」

言いながら持っていた地雷を印の付いた岩に目掛けて投げつける。いとも容易く爆発すれば、獅子奮迅の如く男達目掛けて突き進んでいた祟り神が爆発によって方向を変える。

「次で確実に向かう先がタタラ場になりやす」

上目遣いで見るかのような男の声に長身の男が鼻で笑う。

「さあ、仕上げだ」

云ってその場を立ち去ろうとした時、草木を掻き分けて白い山犬が

立ち塞がった。その背には面を着けた少女が乗っていた。

「これはこれは、噂に聞く山犬の姫君ではないですか」
嫌みたらしい云い方にサンは土面の奥で齒を軋る。

「前口上はいらない。直ちにこの森から出て行け。これ以上産土の神様を怒らせるな」

しばらくの沈黙の後男は事可笑し気に笑い飛ばす。

「あれが、神だと？何を見て言ってるんだ。あれはもう自我を失した祟り神だ、誰にも止められはしない」

言葉の説得が通用しないとはつきりと理解できた。同時に沸々と湧いてくる怒りに任せ、サンは短剣を荒々しく振り回す。

だから、人間は嫌いなんだ…！

ただそれだけを考え、目の前に立つ男に刃を向けた。

その男（前書き）

お久しぶりです。

少々忙し過ぎて更新する余裕がありませんでした。試験が終わると同時に1日7時間の過酷なバイト。そしてようやく一段落かと思われた瞬間に始まるスピード授業。ストレスの解消が出来ないまま今に至ります。

と、前置き（言い訳）はこの辺で今回はあまり書く時間が無かったので、場面展開はございません。戦うシーンを書きたかったわけですが如何せん、私の文章力では描写が難しいかと思われます。話もあやふやな所が多いので出来れば温かい目で見て下されば嬉しいです。

その男

右になぎ払った短剣は軽々と避けられ、そのまま反動で左足を前に蹴り出せばそこに居たはずの男の姿は無かった。一拍置いて、姿を捉えた時首筋に激しい痛みを感じた。呼吸も儘ままならない状態で眼の前の人間を睨めば冷やかな視線を返される。無意識のうちにサンは恐怖を感じていた。しかし、自分の力だけでは抗う事もできない。

「やはり、つまらぬ」

何かに失望するかのように男は言葉を漏らした。

「おのれ…」

腕の中でサンは考えた。先程から感じていた違和感。自分を掴むこの人間のどこにこんな力があるのだと。

「貴様は、何を望んでいる…タタラ場に、祟り神を嚇けしかけて、何をする…つもりだ」

そう問えば、長身の男の側に控えていたもう一人が答える。

「タタラ場にいる、ある“男”^{ひと}に用があるんでござえやす。その人物を誘い出す為の仕掛けとでも言いますか」

「朱縞すこう」

感情のない冷たい声に腰の低い男はそれ以上の言葉を発さなくなった。

「つまり山犬の姫君にはその男を、呼んできて頂きたい」

「そ…んな、戯れ言を…」

しかし首を締め付ける手に更に力が込められる。

「かつ……」

「俺は気が短いんだ。四の五の云わずに従え」

その物言いにサンは無性に腹が立った。男の腕から自分の手を離し背中に隠すと近くまで来ていた山犬にそつと合図を出す。山犬かれらが頷くのを確かめた瞬間、サンは残る力を振り絞り右足を蹴り上げた。

「貴様っ！」

拍子に首からは手が離れ、それを見計らった山犬が二匹同時に噛み付く。

「くそっ、離れる！犬の分際で！」

追い払うかのように無尽に腕を振り回し、サンを見下ろす。

「二度目はない。今日は命拾いしたな」

そう言い残すと最後に山犬の一匹を蹴り飛ばし背を向けて立ち去って行った。その後を追うように朱縞と呼ばれた男もまた姿を消した。男の去り際にサンはその右腕にあるものを見た。否、見てしまった。青く霞むタタリヘビの姿を。

「…呪いには抗えない。シシ神様がいない限り、決して…」

独り言を天に向けて云えば空高く舞う小鳥が二羽過ぎていった。

「何だっただんたろう？あの二人組み」

サンは仰向けにしていた上体を起こし隣に座る山犬に語り掛ければ山犬もまた舌を出しながら応える。

「知らない。サンと争った男はタタリ神の臭いがした。どうする？タタラ場には知らせるか？」

「人間には関わりたくない。タタラ場がどうなろうと関係ないさ」

しかしそうは云うものの僅かに浮かない顔をしていた。

「サン」

山犬に呼ばれ意を決して思っていた事を口にする。

「この事は…伝えたくなかった。けど、このままだとアシタカが危ない。せめてアシタカには教えなくちゃ」

首から下げた紫色に輝く飾りを握り締め、痛む体を引きずりながら

少女は西に向かって降りていった。

その男（後書き）

サブタイとあまり噛み合わない内容のような気がします。ご覧頂きありがとうございます。また次回お会いしましょう。

迫るもの（前書き）

とても適當です。話が繋がらないのでは？なんて思います。
甲六の話し方が分かりません。それなりに合わせてお読み頂ければ
幸いです。

迫るもの

タタラ場の高い塀の上からサンは中の様子を窺っていた。

「…アシタカが…いない？」

中は賑やかに行き交う人々で溢れているが、その中に彼の姿を捉えることは出来なかった。

「これ以上いると人間臭くてたまらない、行こう」

塀から降りようとした時、不運にも見つかりたくない人間に見つかってしまった。

「そこに居るのはもののけ姫ではないか、どうした？お前から姿を見せるとは」

声高に叫ぶ女を見ればサンも心底不機嫌な顔つきになる。

「エボシ」

腰にさした短剣をきつく握り締め一度眼を瞑り深く深呼吸をする。

ここに来た目的を忘れてはいけない。

そう自分に言い聞かせ、再び眼を開けた。

「アシタカに話がある。ここにアシタカはいないのか？」

己の問いかけに平常に答える彼女にエボシは眼を丸くした。

「…今はいいない。奴は東の地へ赴いた。先七日は帰ってこんだろう」

その言葉にサンは絶望した。七日後までに祟り神がこのタタラ場に着かない事はない。このまま行けば間違いなく今宵か明日までに蹈^{みよこ}躑^ち鞆^{たたら}の集落へと辿り着いてしまう。

「七日…七日も待つて居られない。ここから東に向かったんだな？」

確認するように訊けばエボシもしっかりと頷き問い返す。

「ああ、向かった。何故そんなに慌てている？」

「慌ててなどいない。貴様に教える気はない」

そう言い残すとひらりと地に降り山犬と共に森へと戻って行った。

「エボシ様、どうかしましたか？」

自分を気遣う男にエボシは苦笑しながらも指示を出した。

「ゴンザ、今日はタタラの門を厳重に警備しておけ。何かが来るぞ」

「はっはい、かしこまりました」

門の方へ駆けて行く男を見送りながら、エボシは東の空を見つめていた。

「ねえ、アンタは何かアシタカ様から言伝を頂いてないのかい？」

「言伝を？何も聞いちゃいねえけど」

トキは不甲斐ない己の亭主を見ながら深く深く溜め息をついた。

「例えばどこかに向かうとかさ、アシタカ様は焦ってたんだろ？あの人が焦るなんてそうそう無いことじゃあないかい」

「言われてみれば…、けどよお、旦那もこっちの問い掛けに答える余裕がねえみたいな感じだったんだって」

「このグズ！それだけ思い詰めてたんでしょ！アンタが聞いてやらないで誰が聞くんだよ！」

これだけ言われて毅然としていられる亭主ではない。到頭、半泣きのような表情で家内に謝する羽目になった。

「堪忍してくれよう、トキィ…」

再度グズとぼやけば仕事場の一人が何かを叫びながらこちらに走ってきた。

「たっ、大変だ！トキ！化け物が一直線にタタラに向かってくるよ！」

「なんだって！？」

案内された見張り台に登れば、少し離れた位置に黒い塊を見つける。

「何だい？あれ」

近くに居た見張り番に尋ねればさあと、曖昧ないらえを返される。

「我々にも、分かりませぬ。しかし、何か不吉な感じもします」

「そうだね…」

前に抱いた嫌な胸騒ぎはこれだったのか？などと考えながらもタタラにまっすぐ進む黒い塊に眼を向ける。

「石火矢衆を呼んできな。このままだとタタラ場に直撃だよ」

「分かりました」

指示を出し、もう一度視線を戻せばそれはすぐそこまで来ていた。

すかさず脇に置いてあった銃に火をつける。

「このタタラ場には一歩たりとも入らせないよ！覚悟しな、化け物！」

この日、タタラ場に久しく鳴らなかった銃声が響いた。

迫るもの（後書き）

ご覧頂き有り難う御座いました。また次回お目にかかりましょう。

借り（前書き）

今回はコロコロと場面が、というか見る人の目線が変わります。ご了承ください。

空行と空行に挟まれた短文は大抵がその人の心境であると表現したかったのですが読み難かったら申し訳御座いません。場面場面で各々対応願います。

時間軸は少し戻ってアシタカのシーンに入ります。しかし、場面が変わればまた時間軸は進んでいるというあまりにも読み難い文章になっています。最初に謝っておきます。すみませんでした。

借り

草木を掻き分けながら森を走り抜け、風を切るようにヤツクルは野を駆ける。

カヤ、ヒイ様、皆無事でいてくれ！

心で願いながらひたすら手綱を握り締めた。

タタラ場を出て二日が過ぎる頃、蝦夷の村に着いたアシタカは目を疑った。そこにあるはずの村が無かったのだ。

「そんな…村が…」

家屋は焼け焦げ、数頭の赤鹿達^{あかし}が息絶えていた。仲間を弔うかのようにヤツクルは頭を垂れ一頭一頭に近付いていく。アシタカも村人が居ないか一軒一軒確認した。しかし、中は煤で汚れ見るからに人がいた形跡は無かった。村の中心に建つヒイ様の屋敷も原型を留めてはおらず、あちらこちらに禁厭^{きんよう}の石や符呪^{ふじゆ}の札が散らばっていた。辺りを見回しながらアシタカは叫び続けた。

「カヤー！ヒイ様ー！爺^{いぢ}じ！」

しかしそのどれにも応えはなく、変わりに無情な風が吹き抜けた。

サンが森の異変に気づいたのはタタラ場からの銃声音が響いた時だった。

「タタラ場からだ」

サンの一言でどうするんだ、と山犬達が眼で訊ねる。

「…」

暫く考えた末にサンは意を決してタタラ場に戻る事を決めた。

「タタラ場に行こう。産土の神様を絶対に中に入れちゃ、駄目だ」
一度止まると、方向を元来た道に戻し再びタタラ場に向かった。

「エボシ様、もうこれ以上持ちませぬ」

石火矢衆の一人が弾の切れた銃を片付けながら側に居る女に伝える。

「地雷はまだか？あれが来ればもうしばらくは保つと思うのだがな」

エボシは状況を伝えた兵士に頷き、訊ね返すと曖昧な返答をされる。
もどかしさが募る一方でその状況はさらに悪くなる。

「門の一部が破壊されました！恐らく一時^{いつとき}と経たぬうちにタタラ場
へと侵入されます！」

その報告に辺りからは小さな悲鳴が聞こえてくる。

彼なら…、アシタカならどうした？

そんな事を考えながらエボシは次の手その次の手と策を講じていた。
しかし思い付く策のどれもが先程より突破されてきている。このま
までは諦めるしかないのかと肩を落とした時だった。

「エボシ様！山犬が現れました！もののけ姫もいます！」

「こんな時にあ奴は何を考えている？この騒ぎに乗じて私の首をと
るつもりか？」

怒りでも、怖れでもなく、ただただ呆れを通り越し鼻で笑うしかな
いと思っただが今回の報告は違っていた。

「それが…、まるで自分の方に祟り神を寄せ付けるかのように動い
ています。もしかしたら…」

「もしかしたら、なんだ？あの娘がこのタタラ場を助けようとしても

？」

間髪いれずに聞き返され、且つ己が言いかけた言葉の先を衝かれたので伝えた兵士は黙りこくってしまった。

「タタラ場それを助ける事はある事だ。仮にあつたとしても別の目的に過ぎないだろう」

云つて彼女自身もやや間を置き、考えを巡らせる。しかし、今の状況でその意図までを理解するには時間が足りない過ぎた。徐々にバランスを失っていく見張り台は大きく揺れ始めた。

「このままでは倒壊してしまいます！お早く中へ避難の方を！」

どこからか焦つた声がすると、側近のゴンザが逸早く駆けつけ誘導を始めた。そして、崩れかけた塀の隙間から見たのは懸命に何かを叫ぶ少女と少女を護るようにして走る山犬の姿だった。

「借りでも作る気か？あの娘は」

そう呟いたエボシの声は誰にも届く事は無かった。

借り（後書き）

禁厭と符呪は結局同じ意味ですね。まじないに近い意味かと思えます。蝦夷の村がどうなったのかもいずれ書きたいと思います。そして少し解説。アシタカが二日後に村に着いた時、丁度サンがタタラ場を覗きに行った時くらいでしょうか。それくらい、文の中の時間進行は早いんですね（笑）すみません、少し調子こきました。それくらい、私の文章力が無いんです。そして、昨日久しぶりにカラオケに行きました。カラオケに7時間もいるとさすがに声が枯れますね。

それではお読み頂き有り難う御座いました。

答と（前書き）

書く暇が無い為、思い付きで今書きました。もうストック云々の話ではないという事態に少々焦っています。話が繋がらない原因の一つはこれですね。それでも宜しければお読みください。

答と

「それ以上進んではいけない！自分を見失わないで！」

サンは産土の神に向かって慎重に、しかし声が届く様に大きな声で叫び続けた。

「サン、諦めろ。もう手遅れだったんだ」

山犬の一匹が現実を伝えるが、サンは諦めなかった。諦めきれなかった。何とかして、自我を失った祟り神の注意を自分に向けさせたいと思い付く限りの手は尽くした。

「このままじゃ、駄目なのは分かってる！手遅れだった事も、充分わかってる…だけど…」

無力な自分に今の状況を打開する術は閃かなかった。

「アシタ力は…」

言いかけてはつとなった。いつか、彼はシシ神の森に來たイノシシ神達に何かを伝えたはずではなかったか、瀕死の傷を受け一命を取り留めたその時に己の呪いの傷を見せながら、彼は…

ナゴの神を……私は、已む無く殺した。

力なく話す彼の姿が浮かび、次いで残酷な言葉が頭の中に響いた。思わずサンは頭を振りその最終手段だけはなんとしても避けなければと方法を改めて考え直した。そして足元に転がる木の枝を拾い上げた。その重みを手に僅かな希望を抱き、祟り神の方を見た。

「これで気付いてくれるといいけど、お前達、いつでも動けるようにしておくんだよ」

そう云うと勢いよく木の棒を投げつければ見事に祟り神の背に直撃した。振り返った祟り神はサンと二匹の山犬の姿を捉えると、標的を変え真っ直ぐに少女へ目掛けて走り出した。自分に向かってくる祟り神を確認するとサンは山犬に跨る。

「さあ、行くよ！タタリヘビに触れないように走るんだ！」

額に流れる汗を乱暴に拭うとアシタ力がいるであろう東の地に駆け

出した。

村の中心で途方に暮れていたアシタカは妙な胸騒ぎ感じ辺りを見回した。

「この感じ…、何かが…来る…」

ヤックルも気配に気づいたようで頻りに耳を震わせていた。緊迫した空気が流れ、衣擦れの音さえも聞こえない程に静まり返った時、村の外れに二つの人影が現れた。一瞬、己が探し求めていた人物ではないかと僅かに期待したが、それが近付くにつれ輪郭がはつきりとしてくると見慣れない着物を纏った男と戦装束に身を包んだ腰の低い男であることが分かった。

「何者だ、その身なり…この国の者ではないな」

凄みの利いたアシタカの声に背の高い男は卑しく笑った。

「其方そなたはこの東の地に住む一族の一人か？」

「以前はそうだった。今はここを抜け、西の地で暮らしている」
間を置くことなく淡々と答える彼に男は眼を丸くした。

「村を抜けた？では、何故この地に居る？抜けた原因わけはなんだ？」

それには暫しの沈黙が流れ、彼が答えに戸惑いらいっているように窺えた。

「ここが、賊に襲撃されたと聞いた為この地に赴いた。脱村したのはこの身に呪いを受けたからだ」

その言葉に男の口元が僅かに釣り上がったように見えた。

「では、今一度問おう。其方は“蝦夷”えみしのアシタカか？」

「っ！？」

自分の名を知っている自分の知らないその男は、回答を待っているかのように不敵な笑みを浮かべていた。

答と（後書き）

お気に入り登録をして下さった方々、小説評価をして下さった方々、有り難う御座います。自己満で書き始めた小説でありますので、読んでいらっしゃる方々がいる事に喜びを感じ、そして累計アクセス数が3000を超えるという事態に感無量であります。どうぞ、亀更新ではありませんが、最後までお付き合い頂けたら幸いです。

訪れる（前書き）

お久しぶりです。最近バイトが忙しく、授業も進みがより早くなり、てんやわんやな毎日を送っている為に小説を作っている余裕がありませんでした。

今回はあの二人が彼に出逢ってしまいます。彼はどう出るのでしょうかね（笑）

もう、私の小説は時間軸があっちへ行ったりこっちへ行ったり大変です。読んで下さる皆様には大変なご迷惑をおかけします。そろそろ全てが噛み合う様に話を進めて行きたいと思っています。

訪れる

「確かに私がアシタカだ。何故私が蝦夷の者であると分かる？」

待ち望んだ回答に男はさぞ嬉しそうに笑うとアシタカの問い掛けに返答する。

「何、大した事ではない。この村の人間が教えてくれた」

それに驚いたのは彼だけだった。湧いてくる感情を抑え、男の言葉を確かめる。

「それは…どういう事だ」

「愚問だな。この村の状況を見て分からない訳がなかるう」

それはつまり、この惨状に何らかの関与があつた事を示す云い方であり、まるで村人のその後を最もよく知っているような素振りを見せた。

「村の皆に何をした」

ますます込み上げてくる憎悪と一抹の不安を抑え、アシタカは静かに問う。しかし返された言葉はこの状況においてあまりにも残酷なものだった。

「この村の人間に貴様の事を尋ねたのだ。しかし、何を訊いても誰も口を割ろうとはしなかった。だから少々手荒な事をしたまでだ」

これには流石の彼も腰に差していた刀を手に取り男に切りかかった。「云え！皆はどこにいる！？」

咄嗟に出したであろう金具で刀を止める男はアシタカの目の前でその経緯を淡々と、けれども無機質に言い放つ。

「この村に、初めて来た時だ。村の住人はどういつも歓迎的ではなか

つたな」

今より丁度六日程前の蝦夷の村ではいつもと変わらぬ生活を送っていた。

「ヒイ様、今日も田畑では実りの収穫です」

「それは良かった。カヤ、皆の者を集会場へ集めなさい。話があります」

穏やかに微笑んでいたヒイ様の瞳は真剣になり、その事の重大さを感じたカヤも直ちに人を呼び集めた。

「ヒイ様、一体何事なんですか？まだ陽も暮れぬこんな刻に」

「今回、皆を呼んだのはこの村に、危機が訪れているからです」

危機ですかと呟く男の声がしつかりとヒイ様の耳にも届いた。男を見つめる老婆は静かに頷くと言葉を繋ぐ。

「以前この村に深手を負った猪が来たのは、皆も憶えている事でしょう」

それに賛同するように声を上げたのはまた別の男。

「はい。あの時はアシタカが己の身に呪いを受け、この村を救ってくれました」

アシタカという名が出た所で皆が一様に頭を低くする。なんとも云えない気まずい雰囲気になった所でカヤが耐えかねて口を開いた。

「あの猪とまた関わりがあるのでしょいか」

「無論、そう云い切れる訳ではありませんが、それと似た“気”を感じます。今、この場に男手が足りていないのは皆も分かっている事だと思えます。最低限動ける者を集めて、村の警備に当たらせなさい」

その言葉に集っていた男達は力強く頷き、武器を手にとった。

そして、その晩に異国の男は姿を現した。見つけたのは見張り台にいた爺と村人の中では唯一若い男であり、行動に移したのは若い方の男だった。

「トスケ、くれぐれも慎重に動くのだぞ」

爺に云われた男 トスケは頷きながら矢を引く手に力を籠めた。
月光に照らされ、その姿を映し出した時、右腕に怪しく光るタタリ
ヘビを纏いゆつくりと確かな歩調で歩む見慣れない風貌の男に爺と
トスケは眼を凝らした。

「なんじゃ、あの男は！？祟り神：か？」

「俺にも分かりません、あの服も見た事が…」

云い終わるかという時にその怪しい男は見張り台の二人に気づき一
歩、跳躍した。

「！？」

それは一瞬の出来事だった。男が一步飛ぶ所まではしっかりと眼で
追っていた。しかし、今その男が見張り台の、しかも自分達のすぐ
隣まで来ていた。

「貴様、何者だ！？どこからこの地へ来た！？一体どんな奇怪な術
でここまで一瞬で移動したのだ！？」

トスケは酷く動揺しながらも、質問を捲し立てた。それを聞いてい
た男は振り返り、感情の籠っていない瞳で二人の姿を見据えるとこ
う問うた。

「この地に祟り神が眠っていると謂うのは真実まことか？」

月の光に青く霞むタタリヘビがおぞましく刃に映った。

訪れる（後書き）

お読み頂き有り難う御座いました。

トスケはオリキヤラです。勝手に作りました。話を進めて行く上で
やっぱり名前は大切な…。？って思い、つけました。

人質（前書き）

お久しぶりです。しばらく投稿できなくて放置していました。まだ書いている途中だけど、まあいつかと結論付いたので回想から始まり、回想で終わります。この回想も書いていて長いなうなんて感じています。場面、場面の状況を細かく伝えたいなうと思ったのでこうなりました。お読み頂ければ幸いです。

人質

「この地に祟り神が眠っていると謂うのは真実か？」

男の問いかけに僅かに身構えるトスケを制し爺が応える。

「如何にも。この地に…、遙か西より来る祟り神となった巨大な猪の骸が眠っている。其方は何処いどこよりこの地に参り、如何にしてその報せを事伝った？」

流石は歳の功とは云ったもので、突然の来訪にも眉一つ動かさずに質問を続ける爺にトスケは感心した。

「何処…か、この国の者ではないという事だけ伝えておこう。報せは此処へ来る途中で耳にした。して、その祟り神の骸はどこにある？」

これには応える事が出来ず、黙り込む二人を見て男は苛立ちを覚え始めた。

「その場所を云え、俺の気は短いんだ」

急かす異国の人間に爺はきっぱりと断りの文句を並べた。

「それは云えぬ。この村の掟故、外から来た者には一切の事情も漏らす事は出来ない」

その瞬間男の纏うタタリヘビに異変が見えた。青白く月光に輝き透けていたその蛇が徐々に姿を変え、まるでそれ自体が意志のある生き物のように動き始めた。

「爺じ！！」

それは一瞬の出来事だった。形を成したその蛇は見張り台を悉く破壊し木を腐らせ石を溶かしその場に居た二人をも呑み込んだ。

「祟り神は時として生ける神なのだ」

何事もなかったかのようにそこに立つ男は虚しく呟いた。

村では見張り台が倒壊したことにより騒然としていた。

「トスケは戻らぬか！」

「爺じはどうなった!?」

集会場に詰め寄る男達が口々に言い出せば止むことなくあちらこちらから質問が飛び交う。

「皆さん、落ち着いてください！落ち着いて！」

カヤの制す声で一時は静かになるがそれも虚しく、無情にも届いた連絡が辺りを再び騒がしくした。

「見張り台に居たトスケと爺じの姿が見当たらなかった。代わりに、祟り神が通ったような形跡が見られた。恐らくは、…巻き込まれたかもしれない」

「そんな…」

トスケの母親はその場に泣き崩れ、男達はその報せを伝えた男に掴み掛る。

「どういうことだ！トスケはこの村でも一、二を争うほどの実力を持っている！それを、祟り神も止められずに巻き込まれるだなんて！」

そこへ今まで黙って聞いていた老婆が声を上げた。

「ヒダタ力や、その手を放しておやり。…爺とトスケを消したのは、お前だね」

戸口を見つめながら確認するかのように話しかける老婆に、戸口に隠れていた異国の男は姿を現した。

「これは参ったな。隠れて話を聞くつもりが、ここの村の年寄りには勘がいいらしい」

見慣れない服装の男に集った一同は驚き、そしてトスケと同じように矢継ぎ早に問いを重ねる。

「貴様、どこから来た!?」

「トスケを殺^やつたのはお前か!?」

しかし男は辺りを見回し、一番物分りの良さそうな老婆に尋ねた。

「俺のことはどうでもいい。俺はそこにいる年寄りと話がしたい。この地のどこに祟り神の骸は眠っている？」

一瞬眼を見開いた老婆はしかし、すぐに真剣な目つきになると答えた。

「それは、お教えする事ができないという事を知ってて聞いているのかい？」

和やかに問い返すと男の態度は豹変した。

「ああ、同じ事をさっき言われたさ。見張り台にいた爺と野郎にな。だから、この手で消してきたんだよ。お前らも同じ目に遭いたくなかったら、とつとと墓の場所を云え」

脅すように低い声色で話せば後ろにいた女達から微かに悲鳴が聞こえる。それに気づいた男は自分より僅かに離れた位置に立つ少女を視界に捉える。あつという間に片手で少女を引き寄せ、側にあつた短剣をその首元に近づける。

「カヤー!!」

「こいつの命が惜しかったら早くその場所を案内しろ」

さすがに手も足も出せなくなった男達は何とかして今の状況を奪回出来ないかと模索した。

「お待ちなさい。私が案内しましょう」

一拍おいて緊迫した空気があがる。自ら進んで出たのは異国の男がこの中で最も話を通じると践んでいた老女だった。

人質（後書き）

これは微妙でしたね。話が進まない上に出てくる名前は思い付きで決めた名前Aです。

それではまた次回お会いしましょう。

追伸：マイページに自分のホームページをリンク致しましたのでご覧になる方は是非ともいらして下さい。日記とか、その場の思い付きみたいな詩なんかを載せていこうと考え中です。

アルバムや動画も載せてあるので興味のある方はそちらの方もアクセスしてみてください。

追懐の痕（前書き）

ようやく更新ができました。

今回で回想編は終わりです。文章はかなり適当ですので所々話が繋がらない箇所があればご了承ください。見つけ次第直します。

追懐の痕

カヤを人質にした男は自分の先に行く老女に声をかけた。

「まだ着かないのか？」

それは長い時間歩き続けたことに対する怒りと疲労の混じった溜め息にも似た呟きだった。

「もう少しで着きますよ」

先ほどから同じ返答ばかりを返され男の集中が切れていたのかもしれない。とうとう、林の中で男が怒鳴り声を上げた。

「一体、どれだけ歩かせるつもりだ！ここは“あの村”から程遠い林の深部だぞ！！こんな所に墓があるはずがなかるう！！」

その腕の中でカヤが小さく悲鳴をあげる。

「その子を放して下さいましたら、お教え致します」

己が刀を突きつけていた少女を睨みつけ一度舌打ちをすると少女を投げ飛ばした。

「ヒ、ヒイ様っ！」

すぐさま駆け寄るカヤの姿を確認すると、男を見つめたまま口を開いた。

「ちょうど、貴男様の足元に西国の猪の骸が眠っております。」

その言葉に異国の男は足元を見た。そして求めていた“それ”を見つけると賤しく笑った。

「ようやく見つけたぞ、我が仲間を」

「！？」

右腕に全身の力を籠め、地面に描かれた紋を破るかのように強く敲きつけると地割れに沿って青白い光を放ち、次いで重力に逆らって体が持ち上げられるような浮遊感を伴う。

「なっ、何が…！？」

「カヤ、離れてはいけないよ」

取り乱すまいと平静を装い、男の行動を眼で追った。あの時男が発

した言葉が耳から離れない。

“ようやく見つけた”、“我が仲間”。それは自身が祟り神となったことを指し示す言い方だった。

「あの男は：人ではないのかもしれないね」

ポツリと呟いた声は次に響いた大きな地割れの音で掻き消された。大きく割れた地面の下からは白骨化した猪の骸が現れ、男はそれに自分の右腕を翳した。

「闇に囚われた憐れな神よ、今ここに舞い戻り我らと共にこの地に復讐を」

語り掛けるように云えばその腕に纏うタタリヘビが猪の骨を蝕み、やがてそれ自身が“猪”として形を成す。

「そんな…」

想像を絶する眼の前の出来事に二人は言葉を失った。

「貴男様は、一体：？」

老婆の声に振り返った男はここに来て、初めて名を明かした。

「我は海を越えた『明国』の遙か先にある名のない国より来る修僧。名を劉閻りゅうえんと申す」

劉閻と名乗った男は祟り神として蘇った猪を村へ向けて解き放った。
「まずはこの先にある村を消してしまえ。ナゴの守よ」

このまま村を襲うかと思われた瞬間、ナゴの守はその動きを止め徐に言葉を発した。

「穢らわしい人間共の集落を、破壊するのは容易い事だ。しかし我には破壊する以前に、：あの男をこの手で葬り去りたい」

それに反応を示した力ヤの脳裏をアシタ力の姿が過る。あの時自分が転ばなければ、もっと別の方法でナゴの守を鎮められたのかもしれない。隣にいるヒイ様もアシタ力の腕の呪いを思い、静かに瞳を閉じる。劉閻は首を捻り、問い尋ねる。

「ナゴの守よ、そんなにも怒りを抱く人間がこの地にいると？」

巨大な猪はその男を一瞥すると、ゆっくりと口を開いた。

「あの日、我に止めを刺した年若い男がこの村にいる。其奴をかみ

殺してしまいたい」

ナゴの守の怒りを聞いた老婆はその場で二度お辞儀をすると猪の前に立った。

「いまし、荒ぶる神よ。畏^{かしこ}み畏^{かしこ}み申す。貴方様の御探し求める若男は、その時に受けた呪いの傷を絶ち抜うべくこの地を去り、遙か西へと赴き致しました。されど、受けた傷は事重く、生命を危ぶむ程のもので御座いました。故に、この経年と余月最早この世には存在しえないかと思われます」

神を敬う様に事実を伝えれば、猪はそれ以上は云わなくなった。何かを深く考えるように瞼を閉じ、自身の体を成し這いずり回るタタリヘビを空高く舞い上げる。天を衝く程の勢いで上ったそれは、けれどすぐさま元の位置へと戻り再び猪として留まる。一拍おいて何かを捉えたかのようにその瞳は開かれた。

「…否、まだ、生きている。この我を死へと追い遣った憎きタタラ場で、今も生きている」

云い放たれたその言葉は僅かに力やに希望を持たせた。

「兄様が…まだ生きて…」

勿論、劉閻はそれを逃さなかった。

「その後は、云うまでも無いだろう。邪魔な奴はとことんまで消したさ。女を人質にしまえば、あいつ等洗い浚い話してくれたよ。お前の事も、村の事もな」

一通り聞き終えたアシタカは怒りと悲しみに満ちていた。

「おのれっ！よくも村の皆を！！徒^{ただ}では済まないぞ！！」

持っていた刀を再び振り翳した時、木々を薙ぎ倒し村へと姿を現したのはあの時自分が止めを刺したナゴの守だった。

追懐の痕（後書き）

少し長かったです。この話で無理やりにも回想編を終わらせたかったので一気に詰め込みました。

それではお読み頂き有難う御座いました。

呪と格（前書き）

お久しぶりです。しばらくバイトと試験に追われ小説を作る時間がありませんでした。ようやくひと段落したところで今回は短いですが投稿しちゃうとおうと思いつきました。話の内容は全くもって進んでいません。しかも、今さら気付きましたが、マゴの神ではなくナゴの守でした。完璧なミスでした。いくつか気付いた所は直しましたが、直っていない所があればご指摘ください。直しますのでw

ウォーリーを探せ！みたいな感じです。それでは駄文ですが、お読み頂ければ幸いです。

呪と格

「貴様だな、この我に止めを刺したのは」

腐敗の域を超えた悪臭を放ち、タタリヘビでできたその猪は、最早神とは言えなかった。思わず、アシタカは鼻を覆う。

「何故、そこまで復讐に拘る。^{くだわ}名の知れた土地神のはずだ、これほどまでに呪いに憑りつかれるとは」

そう云えば、ナゴの守は憤慨したように声を荒げる。

「元は貴様等人間がここまで我を陥れたのだ！欲深き人間共が神聖な森を焼き尽くし、我は、本来在るべき場所を失くした！」

その言葉に当時のエボシ達の非道な侵略が想像できた。あの出来事があったからナゴの守は今、こうして深い憎しみに駆られ、人間に復讐する為、果ては在る^{その}べき場所の奪還の為崇り神となりその存在を誇示している。アシタカは何も云えなかった。何かを考え、不意に顔を下げる。

「確かに、私達人間が森を燃やし、神々の棲む地を奪ってきた」

そこで一度区切りをつけるかのように口を嚙む。そしてゆっくりと顔を上げた。

「しかし、ナゴの守よ。そうして得た力によつて、再び森を取り戻せたとして、果たして崇り神となった其方を、森は受け入れてくれるだろうか」

語りかけるように、それでも言葉を選びながら述べるが憎悪で自我を失しかけたナゴの守にその声は届かなかった。

「黙れ！人間の分際で森を語るつもりか！貴様に何が分かる！」

一言一言叫ぶ度に猪の軀からは朽ちかけたタタリヘビの残骸が飛散する。

もう、限界に来ている。

アシタカはそう感じた。猪として形を成していたそれは徐々に崩れ落ち、数分と経たぬ内にこの崇り神は土塊^{つちくれ}と化すかもしれない。ど

んな手段ほうほうでもいい、最期の一欠片の想いだけでも汲んであげたかった。

「どうすれば…」

云いかけて猪とは違う別の殺気を感じ、瞬時に身を翻す。

「ほう、今の攻撃を躲けるとは。大したもんだ」

卑しく笑う男の存在を忘れていた。

「劉閻と、いったな。其方は何故ナゴの守をこのような形で蘇らせる事ができる？」

アシタカの問い掛けに数拍の間を置き、劉閻は問いで返す。

「この身を喰い尽くそうとするタタリヘビを、自らの意思で動かせる事が可能だと思うか？」

有り得ない、そう云おうとしたが今まで起こった出来事が全て、この男の意思で動いているとしか思えなかった。そんなアシタカの心情を察してか劉閻は続ける。

「俺にはタタリヘビの意思が分かる。そしてこの力の使い方も、他の奴等とは違う。貴様のように中途半端な呪いを受け、その呪縛から解かれた無能な人間とは格が違うのだ」

云い終わると同時に呪いの力を纏った劉閻は一気に距離を詰めアシタカに殴り掛かった。それを間一髪で近くにあった刀の鞘で受け止めると男が触れた箇所から腐朽していった。

「賢い判断だな。この攻撃を生身で受けない方がいい。呪いを再び受ける事になる」

知らずアシタカの頬を汗が伝う。緊迫した空気が辺りを包み込んでいた。

呪と格（後書き）

問い掛けに問いで返した挙句、答えになっていないという失態です。この詳しい説明は次回致します。今回は流れで何となく読んで流してくれればいいかなゝなんて思います。しかもこの小説、しばらく放置していたのに気付けばアクセス数は6500アクセスを超えるという驚異の値。こんな駄文をお読み頂き有難う御座います！また次回お目にかかりたいと思います。

希う（前書き）

試験ばかりで鬱になる今日この頃。時間が欲しいです。いつかドラえもんが来ないかと本気で考えた時もありました。馬鹿ですね。夢のまた夢の話です。ポジティブに言えばユーモアがある、ネガティブに言えばそんな事考えてる暇があれば勉強しろと、そういうワケです。

はい、前置きはこの辺で…。本文ですが短いです。余りにも短いです。今回で色々と説明文を入れるつもりでしたが、無理でした。また次あたりにでもやりたいと思います。

希う

怒りで震え上がる拳を握り締め、ちらりとヤツクルのいる位置を確認する。手を伸ばせば届く距離にいるが一步動けば、あるいは筋一本動かせばすぐさま劉閻の呪撃を受けるだろう。僅かに身を屈めたアシタカと悠長に構える男は互いに動かず、双方相手の出方を窺っていた。不意に男の唇が動く。

あかし
「赤鹿に乗って逃げ切れれば、助かると、思ったか」
「っ!？」

まさに考えていた事を云われ、動揺を隠せなかった。

「何故、そう思う」

平常に問えば、劉閻はまるで挑発するように右手を上げる。

「貴様と俺は繋がっているんだよ。分かるか、貴様の嘗ての呪いは未だにその身に跡を残している。そしてその呪いは俺の右手と呼応している。これは祟り神から受けし、神の導き。謂わばこの呪い同士が共鳴しているのだ」

「そんな事が人間にできると過信しているのか」

アシタカの言葉に男は僅かに眉を寄せる。

「過信？それは違う。これは選ばれた者だけが踏み込める、神の領域。否、それ以上の存在を意味する。死を恐れ、呪いに怯え、この力を断ち切った奴とは格が違う!」

劉閻は上げていた右手をさらに頭上に上げると黒い球体を作り上げた。

まえんろつじやく
「魔焰籠擲」

タタリヘビで形成されたそれは球体自体が生き物であるかのように、あらゆる形に変形しては球に戻る。

あれに触れたら一溜まりもない。

己の直感がそう伝えている。緊張で強張った右足をほんの数ミリ引いた。直後、男の口元が動いたのを見逃さなかった。

「消える」

その声が重く響き渡った。

サンは二頭の山犬とアシタカが向かったであろう東の地へ駆けていた。

「サン、追いつかれるぞ！このままだと全滅する！」

「分かってる！もう少し、もう少しだから！」

臭いを頼りに走り続けてきた山犬達の疲労は目に見えていた。しかしすぐ後ろに祟り神が迫っているのも事実。止まる事はできなかった。そして一つ気にかかっている事があった。風に乗って感じるアシタカの臭いの他にもう一つ別の臭い^{それ}がする。禍々しいそれは自分の知る嫌いな人間の臭い。

「あの男か……！」

奥歯を軋りながらその先を睨み付ける。嫌な予感がして仕方がなかった。

「アシタカ、絶対に死ぬな……！」

祈りにも近い願いを言葉にし、以前アシタカに貰った玉^{ぎよく}の首飾りをきつく握り締める。冷たい風だけが吹き抜けていった。

希う（後書き）

イマイチ話が繋がりませんでした。しかも、もののけ姫に攻撃名を入れるという中2病的発案。昔にあった中国のなんちゃらみたいな技名と思って頂ければ幸いです。

それでは「希う^{こいねがう}」お読み頂き有難う御座いました。

生きる事（前書き）

生きる事は素晴らしい事だと思います。毎日笑って、楽しく過ごしているからこそ“生きる”んだと思います。“命”を大切にして下さい。どんな物にも“命”はあると思いますから。

生きる事

音を立てて木々の合間を走り抜け、一直線にアシタカがいる村へ向かう山犬達とそれに乗る少女は既に傷だらけだった。犬達の爪は深く割れ出血し、少女の腕や腿は擦れる草木で何ヶ所も切れていた。それでも止まる事なく走り続けた。

「もう少し、もう少しだから…！」

握り締めていた玉を更に強く握り締める。チクリと俄かに痛みを感じたが、焦りと緊張から気にしている余裕など無かった。徐々に視界が晴れていくと、遠くの方に巨大な猪神が見えた。

「あれは…？」

目を凝らしよくよく見ると至る所が腐敗し、猪と思われたそれは夕タリヘビによつて形を留めていた。少女はすぐに頭で理解した。

「お前達、あれに触れてはいけないよ。あれも崇り神だ」

頷く山犬達にサンは手で合図を出す。こちらに気付いた猪は突進する姿勢になり、僅かにその身を引く。瞬間、切に望んでいた彼の姿が確認できた。

「…いた」

サンは迷う事なく崇り神となった猪目掛けて向かっていった。

男が掲げた両の手の平の先には禍々しい巨大な球。自分の後ろには

ヤツクルがいる。巻き込まれ無いはずがないと確信が持てた。

「ヤツクル、出来るだけ離れた場所に逃げていろ」

ポツリと誰にも聴こえないような小さな声で指示を出す。しかし、ヤツクルにはその声がしかと届いていた。主に言われるがままにヤツクルは身を翻し、木陰へと消えていった。それを目撃した劉閻は隣に立つナゴの守に声を上げる。

「赤鹿が逃げるぞ！ナゴの守よ、あいつを逃がすな！」

しかしその声は届かず既に別の標的を定めたらしいナゴの守はヤツクルとは別の方向へと走り始めた。

「！？」

男が驚いた一瞬の隙をアシタカは逃さなかった。弓矢を構え、男の右腕に向けて矢を放った。逸れる事なく矢が劉閻の右腕に刺さると彼は激しく苦しみ出した。

「ぐあああああつ！…っおのれ…！」

右手で黒球を支え、左手で矢の刺さった部位を抑える。その一部始終を全て見ていたアシタカはある事に気付いた。男の右鎖骨から二の腕にかけて夥しい程の呪符が捲かれていた。それが何を示しているのか漸く理解した。恐らくはあの呪符によって祟り神の呪いを抑え、今までの計り知れない力へと還元していたのかもしれないと。

「それが力の根源^{もと}か」

そう云えば苦しみながら睨みつける男と眼が合う。その瞳は深い憎しみの色を帯びているようだった。

「たったこれだけの攻撃で図に乗るな！」

劉閻は一時の間の後に上げていた右手を振り落とした。避けるには余りにも大き過ぎるその塊は一瞬で劉閻の体を超え自分を包み込むほどの円になる。

避けきれない…！

そう悟った時、本来なら此処に居るはずのない少女の声が響いた。

「アシタカー！！」

山犬に跨り、ナゴの守の頭上を飛び越えたサンはアシタカ目掛けて躍らす様に飛びついた。言を発するより早く視界が反転する。目の前には見慣れた白い仮面と何処までも広がる青空が飛び込んで来た。そして二人と一匹はその勢いのまま斜面を滑り落ち、大木の根本にぶつかると漸く止まる事ができた。

「…っ！アシタカ！無事だったか！？」

自分の上に乗る少女は身を乗り出して尋ねる。アシタカは苦く笑いながら肯定する。

「な…なんとか…、大丈夫だ」

それを聞くと安堵したように息を吐き、全身の力を抜くサンを見れば切り傷や擦り傷があちらこちらにあり、体はボロボロだった。

「私を、助けてくれたのか？そんなに傷だらけになってまで…」

「勘違いするな、私はアシタカに産土の神様を助けてもらいたくて…っ！」

サンは何かを思い出したように顔を上げると、つい先程転げ落ちてきた斜面を登ろうとする。が、その腕をアシタカに掴まれ引き止められる。

「私が先に行く」

ゆっくりと気配を殺し、木陰から元いた場所を見やる。その光景を見て愕然となった。村が跡形もなく消し飛んでいた。あるのは黒い塊を投げた男とナゴの守、そして不運にも男の攻撃を受けてしまった別の祟り神の残骸だけが残っていた。

「な…、村が…」

辺り一面には未だに黒く腐食した箇所が生々しく残り、それはまるで巨大な祟り神が通った後のようになっていた。

「こんなことが…」

同じくそれを見ていたサンも驚愕の色を隠せなかった。と、そこに別の人間が走り寄っていくのが見えた。

「旦那、旦那。まだ、無理をしなさってはお体に響きますぜ。あの

男も消せたんでやしょう？ここは一先ず……」

「朱縞、奴はいるか？」

苦痛な表情で問えば歩み寄った男は首を横に振る。

「何処にも見当たりやせん。恐らくは跡形もなく消えたかと」

「そうか」

それだけ言つと二人はその場を後にした。

「どうやら、あの男はサンが飛び込んで来たことに気付いていなかったらしい」

「あの二人組は前に、森で逢った事がある。産土の神様をタタラ場に噓けようとしていた」
けしか

驚いてサンを見れば、どこか苛立ったような表情で語る。

「あいつ等は嫌いだ。森の生き物達を平気で傷つける。命をなんだと思つてるんだ」

かける言葉を探していると不意に物音が響いた。

「！？」

振り返つてみるとナゴの守が朽ち果てたその軀を引き摺つて産土の神の下へと寄つて行った。

「……憐れナ、ものだ。我ラ土地神が、何ヲした？徒に害され、利用され、悪しき呪いによつて……その身を滅ぼす」
いたすら

徐々に崩れていくナゴの守はもう見えないであろう両の瞳で確かに男女の姿を捉えていた。

「もう、逝つてしまわれるのか。私達人間が最後まで、尊き神々を苦しめた事、できれば償いたかった」

惜しむ様に謝するアシタ力を見て、サンもそれ以上は何も言わなかった。

「……憎しみに囚われた、我らの罰だ。祟り神となつた我ラは生きる事から、逃げてい、た。生を求めるが故に、復讐しか、思いつかなかった、のかも知れん。シシ神も、気付いて……いたのかも、しれな……い、な。……悪い、事ヲし……た」

それだけ言い残すと砂が舞うようにさらさらと消えて逝った。産土の神の軀も後を追うように灰となり姿を消した。

生きる事（後書き）

ということで、この二人、またまた合流しました。え？そんなに早くサンは追いついたの？という問いはスルーしてください。きつと山犬の足は速いんです。きつと…。誤字脱字があればご指摘願います。

それではこんな駄文をお読みいただき有難う御座いました。また次回御目にかかりましょう。次は中間試験明けに投稿する予定です…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1500w/>

山犬の姫と

2011年11月27日16時54分発行